

平成
25
年版

科学技術白書

イノベーションの基盤となる科学技術



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

社会技術研究開発は「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」、「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」、「犯罪からの子どもの安全」、「科学技術と人間」、及び平成24年度から新たに開始した「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」を合わせた5つの領域と、「問題解決型サービス科学研究開発プログラム」、「科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム」の2つのプログラムを通じて行われている。

コラム 2-2

柿作りで生涯現役 —奈良県下市町栢原地区の取組—

科学技術振興機構 社会技術研究開発センターが実施する研究開発領域「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の取組の一つに、奈良県下市町栢原地区で実施されている「高齢者の営農を支える『らくらく農法』の開発」プロジェクト（代表者：奈良女子大学 寺岡伸悟准教授）がある。日本の中山間地の農村コミュニティには、高齢化の進行と次世代の担い手不足から、近い将来存続の危機を迎える可能性の高い地域が数多くある。このため、こうした高齢生活者を中心とした営農コミュニティをいかに維持していくかが当面の課題となっている。

奈良県下市町栢原地区は、奈良県有数の広大な柿畑を有する、古くから開けた中山間農村地帯である。乏しい公共交通と全体の8割が傾斜度20度を超える狭あいな柿畑からなるため、高齢化に伴い、10年後には重労働を伴う柿栽培・収穫の担い手が激減し、コミュニティの崩壊も懸念されている。

そこで、奈良女子大学、奈良県農業総合センター、国立奈良工業高等専門学校、地元の農工機械メーカーと地域住民によるチームで、高齢者でも容易に扱える点に十分配慮した新しい柿果実運搬のための電動農作業車の開発、柿果実以外に柿葉生産を行う「らくらく栽培」と、これを使った柿の葉寿司といった加工品など、高齢農業従事者が楽しく、生き生きと農業を営める「らくらく農法」の環境構築を目指している。今後の定着のため、コミュニティ構成員各々が将来像を容易に展望できるよう、コミュニティと協調して取組を進めている。



資料：開発した柿果実運搬のための電動農作業車
提供：科学技術振興機構 社会技術研究開発センター

② 人々の感性や心の豊かさの増進に向けた取組

総務省では、デジタルコンテンツの製作・流通を促進する観点から、我が国コンテンツの発信による経済活性化、コンテンツ製作・流通環境の整備、新しいコンテンツ流通プラットフォームの検討を行っている。

文部科学省では、文化と科学技術の融合による新たな文化創造にも寄与することを目指し、鑑賞者が有形無形の文化資産を五感で対話的に体験できるデジタル・ミュージアムの実現に向けた研究開発を実施している。